日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　Vol. 25 No. 1, 101-109 (2024)

【研究論文】新聞（生活面）において 2004 年以降一般化した外来語

野崎　登司枝
日本大学大学院総合社会情報研究科修了生

Loanwords that have become commonly used in lifestyle sections of newspapers since 2004

NOZAKI Toshie
M.A., Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University

This study aims to identify prevalent loanwords in the lifestyle pages of newspapers in recent years. The research methodology involves comparing the 100 most frequently used loanwords from 2004 to 2021 with both the Classification Vocabulary Table and the basic vocabulary lists presented in earlier studies. The findings indicate that the loanwords that have become commonly used in the lifestyle pages of newspapers since 2004 include “recipe,” “SUMAHO(smartphone),” “website,” and “blog.”

1. 研究の背景と目的

コロナ禍において厚生労働省は「クラスター」「ロックダウン」「ソーシャルディスタンス」などコロナウイルスに関連した外来語[1]を多用した。厚生労働省に分かりやすく言い換えるよう求める動き[2]も政府内にはあったが，数年に及ぶコロナ禍を経て，それらの外来語は一般化[3]した。近年一般化した外来語は，コロナウイルス関連にとどまらないだろう。では，具体的にどのような外来語が一般化して使用されているのか。一方，近年一般化された外来語が，日本語学習者用教科書や単語帳に掲載されるのには時間がかかる。外来語は日本語学習上の大きな課題といわれているが（陣内　2008，彭　2003），特に近年一般化された外来語は，教科書に掲載されておらず学習が難しい。そこで，本研究では，近年の新聞を対象に外来語を抽出し，これまで先行研究で提示されてきた外来語のリストと比較することによって近年一般化された外来語を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

日本語学習者にとって必要性が高いと思われる外来語は，先行研究によってリスト化されている（井上　2004，望月　2012，平田・山下　2020）。井上（2004）は，複数のデータベースを用いて「カタカナ語（外来語）基本語彙 550 語」を選定した。望月（2012）は，外来語学習用教材開発のために『日本語能力検定試験出題基準【改訂版】』（国際交流基金 2002），複数の中級～超級教材，『最新カタカナ語辞典第２版』（講談社編　2000）の見出し語と，井上（2004），金（2011）のリストから 300 語を選定した。平田・山下（2020）は「外国人生活者のための基本カタカナ語彙」として，4 冊の日本語教科書（地域日本語教室で使用されているもの）全てに掲載されたカタカナ語と生活者向け漢字教科書の写真に使われているカタカナ語を抽出した。そして，平田・山下が必要と考える語を追加し，129 語のカタカナ語リストを作成した。

外来語の語彙研究として新聞を調査資料とした先行研究がある。佐竹（2002）は，日常生活で使用される外来語を知るためには「生活家庭面」が適しているとし，1997 年発行の新聞三紙（生活家庭面）で

多く使用された外来語 139 語のリストを示した。中山他（2007）は，1994 年から 2003 年に発行された毎日新聞において使用範囲が広く使用率が高い外来語を「基幹語彙」[4]として生活面を含む各面種ごとに 100 語のリストを示した。中山他（2007）は，「外来語に関する調査研究」（国立国語研究所「外来語」委員会 2007）の一環で記事数 860,660 本，総文字数 452,307,833 語を調査するという大規模なものであった。これほどの規模で行われた調査は菅見の限りない。野崎（2024）は，佐竹（2002）に倣い『朝日新聞クロスサーチ』を用いて，朝日新聞（生活面）において多く使用された外来語上位 100 語を示した。野崎（2024）は，大規模な調査であった中山他（2007）が 1994 年から 2003 年に発行された新聞を調査資料としたことを受け，それ以降となる 2004 年から 2021 年に発行された新聞を調査資料とした。

以上，日本語学習者に必要と思われる外来語のリストとして，井上（2004），望月（2012），平田・山下（2020）が出されているが，井上（2004）は，1926 年から 1998 年，望月（2012）は 2001 年から 2011 年，平田・山下（2020）は 1997 年から 2015 年に発行された資料をもとに選定している。2015 年以降に発行された資料を基にしたリストは管見の限り野崎（2024）以外見当たらない。2004 年から 2021 年までの新聞データを基に使用頻度の高い外来語を示したこのリストは，現時点で最も新しい外来語の使用状況を示すものと考えられることから，本稿では，野崎（2024）の外来語リストと 2023 年以前の先行研究を比較対照することで，近年の外来語の傾向や，一般化された外来語を探ることとする。

3. 研究課題

本研究の目的は，近年の新聞を分析した現時点で最新の外来語リスト（野崎 2024）と，それまでの先行研究（以下，2023 年以前の先行研究）で提案された外来語リストと比較分析することにより，近年一般化された外来語について明らかにすることである。具体的には，2004 年から 2021 年の新聞（生活面）で使用される頻度が高いことが示された外来語 100 語（野崎 2024）のうち，分類語彙表やそれまでの先行研究で示されたリストに含まれない外来語にどのようなものがあるかを明らかにすることを研究課題とする。期待される効果として，外来語基本語彙[5]への追加提案，ひいては日本語学習者による外来語学習の一助となることがあげられる。

4. 研究方法

本稿では，近年一般化された外来語として，2004 年以降に広く使用されるようになった外来語を抽出する。2004 年以降としたのは，2004 年より前から一般的に使用されていた語[6]は，『分類語彙表 増補改訂版』（国立国語研究所 2004）（以下「分類語彙表」とする）に掲載されており，2003 年以前に発行された新聞（生活面）で多く使用されていた外来語は先行研究（中山他 2007）で明らかにされているからである。2004 年以降の資料を基にした外来語分析は，野崎（2024）以外研究ノートレベルでしか見当たらなかったので，本稿ではこれを分析資料の基準とする。野崎（2024）では，2004 年から 2021 年に発行された新聞（生活面）を対象に，外来語上位語を調べ，上位 100 語のリストを示している。2004 年以降一般化された外来語の選定は，野崎（2024）で明らかにされた外来語 100 語（以下「野崎 100 語」と呼ぶ）と「分類語彙表」並びに，2023 年以前の先行研究 5 本のリストを比較対象とし，野崎 100 語にのみ掲載されている外来語を抽出する。野崎 100 語は，次の通りである。

キロ，メール，グラム，カロリー，センター，センチ，カップ，ケース，ミリ，テレビ，ポイント，ボウル，メーカー，グループ，インターネット，ホームページ，テーマ，リスク，レシピ，ホーム，サービス，パソコン，タイプ，メートル，イメージ，チェック，トイレ，サラダ，スタッフ，ベッド，ケア，チーム，ストレス，ボランティア，トレーニング，データ，トラブル，アドバイス，バランス，ネット，クリニック，パート，ウイルス，マンション，スマホ，クラブ，キーワード，スポーツ，ソース，スーパー，レンジ，スープ，アップ，アンケート，サポート，バス，ネットワーク，デザイン，イ

ベント，メニュー，ショック，リハビリ，カメラ，ラップ，メンバー，リスト，パック，グラフィック，コミュニケーション，シリーズ，スタート，ママ，リットル，デジタル，アルバイト，ルール，バター，システム，ウェブサイト，ホテル，チーズ，カード，モデル，プロ，ブログ，スタイル，キッチン，セット，ビル，ペット，カレー，パン，ワイン，タオル，ニュース，エネルギー，ヘルパー，レベル，プログラム，メモ（使用された記事の件数が多い順）

比較対象の資料とする 2023 年以前の先行研究のリスト 5 本は以下の通り。太字で書かれたリスト名は便宜上，筆者が命名したものである。

- **井上 550 語**
  井上道雄（2004）「カタカナ語（外来語）基本語彙 550 語－その語彙特性と選定基準」
- **望月 300 語**
  望月通子（2012）「基本語化を考慮したカタカナ外来語の学習と教材開発－その振り返りと新たな開発に向けて－」
- **平田・山下 129 語**
  平田史織・山下直子（2020）「外国人生活者のための基本カタカナ語彙について」
- **佐竹 139 語**
  佐竹秀雄（2002）「新聞の生活家庭面における外来語」
- **中山・桐生・山口 100 語**
  中山恵利子・桐生りか・山口昌也（2007）「新聞に見る基幹外来語」（家庭面）

井上（2004），望月（2012），平田・山下（2020）を取り上げた理由は，日本語学習者にとって必要性が高いと思われる外来語を提示しているという観点からである。佐竹（2002），中山他（2007）を取り上げた理由は，2003 年以前に新聞（生活面）で多く使用された外来語という観点からである。

以上 5 本の 2023 年以前の先行研究で示されたリスト並びに分類語彙表と野崎 100 語を対照し，共通点と相違点を探る。そして，分類語彙表にも 5 本のリストにも含まれていなかった語を求める。続いて，それらの語を『朝日新聞クロスサーチ』を用い，朝日新聞（生活面）において時系列に何件の記事で使用されていたかを調査分析する。

5. 研究結果

5.1　共通していた語とそうでなかった語

2023 年以前の先行研究で示されたリスト 5 本並びに分類語彙表と比較した結果は，次の通りである。5 つのリストに掲載され，分類語彙表にも掲載されていた語は「ホーム」「サービス」「タイプ」「スタート」の 4 語であった。4 つのリストに掲載され，分類語彙表にも掲載されていた語は 28 語，3 つのリストに掲載され，分類語彙表にも掲載されていた語は 27 語，2 つのリストに掲載され，分類語彙表にも掲載されていた語は 21 語，1 つのリストに掲載され，分類語彙表にも掲載されていた語は 11 語であった。分類語彙表には掲載されていたが，先行研究のリストには掲載されていなかったという語は「ウイルス」「キーワード」「グラフィック」「キッチン」の 5 語であった。分類語彙表にも先行研究のリストにも掲載されていなかった語は「スマホ」「ウェブサイト」「ブログ」「レシピ」の 4 語であった。この 4 つの語が初めて使用された年以降，それぞれの語が記事で使用された件数[7]を『朝日新聞クロスサーチ』[8]を用いて集計し一覧にしたのが，表 1 である。そして，次の項でこの 4 語について朝日新聞（生活面）に掲載された実例を挙げながら使用の様相をみていく。

5.2　「レシピ」と「スマホ」の分析結果

「レシピ」という語であるが，1998 年に初めて使用され，その後少しずつ増加したが，2019 年から使用頻度が急激に増えている。これは，朝日新聞（生活面）にほぼ毎日連載されている「料理メモ」に以下の一文が記されているためといえる（太字は筆者による）。

(1)「過去 9 千件の**レシピ**検索はこちら（スマホのみ）」
(2)「過去 1 万件の**レシピ**検索はこちら（スマホのみ）」

表 1　2004 年以降一般化した 4 語の年別使用件数

年	レシピ	スマホ	ウェブサイト	ブログ
1998	1	0	0	0
1999	2	0	0	0
2000	2	0	0	0
2001	0	0	0	0
2002	1	0	0	0
2003	0	0	2	0
2004	27	0	0	0
2005	34	0	23	14
2006	34	0	22	16
2007	20	0	12	34
2008	22	0	26	187
2009	35	0	198	82
2010	67	0	92	20
2011	42	4	30	34
2012	41	1	33	29
2013	44	26	20	23
2014	26	18	20	21
2015	44	29	32	19
2016	36	25	26	17
2017	43	23	11	16
2018	49	14	13	13
2019	196	188	21	15
2020	278	291	21	8
2021	279	290	16	11

「(スマホのみ)」とされているのは，パソコンではなく，スマートフォンのみで過去に紹介されたレシピを検索できることを知らせる文である。複合語としての使用例は，「レシピ本」「レシピ集」「レシピ通り」「レシピサイト」などであった。「レシピ」の意味は「①料理の材料の分量と作り方。②処方箋（三省堂編修所編　2021）」とされている。日本語教育語彙表（日本語学習辞書支援グループ　2015）では「飲み物や料理などの作り方。調理法。また，秘伝や秘密の方法。」とされている。しかし，以下のような使用例も見られた。

「手芸店の多くでバッグなどの作り方を記した「**レシピ**」を用意している。」（2011 年 3 月 7 日）

「ほぼすべての作品に**レシピ**（説明書）があり，材料と作り方がわかります。店員に声を掛けてみてください。」（2013 年 9 月 1 日）

本来，飲み物や料理の作り方を示す「レシピ」という語の意味が拡張し，飲み物や料理の作り方以外での使い方が見られた。

次に「スマホ」という語の使用例をみていく。「スマホ」は「スマートフォン」の略語である。「スマホ」が朝日新聞（生活面）で初めて使用されたのは 2011 年で，2021 年までの間に 909 件の記事で使用されている。総務省（2017）によると 2011 年のスマートフォン個人所有率は 9.7%で，2015 年には 53.1%になっている。しかし，個人所有率に比例して「スマホ」の使用数が増えたとはいえない。これは，先に述べたようにほぼ毎日掲載されている「料理メモ」に記載された一文があるからと考えられる。「スマホ」は，期間中 909 件使用されていたが，そのうち前述した（1），（2）の文は，計 661 件の記事で使用されていた。残りの 248 件は「料理メモ」以外で使用されている。ちなみに「スマートフォン」という語は，期間中 260 件の記事で使用されている。つまり，「料理メモ」で使用された件数を除いた場合「スマホ」と「スマートフォン」の使用頻度は大きく違わないといえる。

5.3　「ウェブサイト」の分析結果

「ウェブサイト」に類似した語に，「ホームページ」がある。「ウェブサイト」という語が初めて朝日新聞「生活面」で使用されたのは 2003 年である。2003 年から 2021 年まで 1 年間に何件の記事で「ウェブサイト」と「ホームページ」が朝日新聞（生活面）で使用されたかを集計した結果が表 2 である。表 2 の通り「ホームページ」も朝日新聞（生活面）で使用される頻度が高かった。この 2 つの語の使い分けについて NHK 放送文化研究所（2021）は以下のように述べている。

「ホームページ」は，もともとはウェブブラウザーを起動したときに最初に表示されるページのことでした。転じて，ウェブサイトのトップ

表 2　ホームページとウェブサイト年別使用件数

年	ホームページ	ウェブサイト
2003	21	2
2004	136	0
2005	166	23
2006	164	22
2007	147	12
2008	97	26
2009	84	198
2010	85	92
2011	104	30
2012	87	33
2013	57	20
2014	41	20
2015	36	32
2016	67	26
2017	57	11
2018	35	13
2019	35	21
2020	53	21
2021	33	16

ページのことを「ホームページ」と呼ぶようになったものです。
（中略）インターネットが一般化する過程で，日本語では「ホームページ」ということばが「ウェブサイト」全般を指すという「意味の拡大化現象」が起きました。（中略）最近の国語辞典で「ホームページ」の項目を見ると，書き方はさまざまですが，多くがウェブサイトとトップページと両方の意味を載せています。このことからもウェブサイトのことをホームページとする用語の使い方については，すでに市民権を得ていると考えます。

このように NHK による放送では「ウェブサイト」と「ホームページ」は，ほぼ同義語として扱われていることがわかる。2004 年から 2021 年に発行された朝日新聞の「生活面」において「ホームページ」が使用された記事の件数は 1484 件，「ウェブサイト」が使用された記事の件数は 616 件で「ホームページ」の方が「ウェブサイト」の 2 倍以上使用されている。これは，NHK 放送文化研究所（2021）が述べたように「ホームページ」のほうが多くの人に伝わりやすいと考えられていることの表れだろう。

「ウェブサイト」は 2009 年に 198 件の記事で使用されているが，それ以外の年で使用された記事の件数は「ホームページ」の方が多い。しかしながら，表 2 のように「ホームページ」と「ウェブサイト」が使用された頻度を比較すると「ウェブサイト」も恒常的に使用されている様子がうかがえる。

5.4　「ブログ」の分析結果

「ブログ」は「個人が身辺の出来事や自分の主張などを日記形式で書き込むインターネットのサイトやホームページ。ウェブ（web）とログ（log）との造語「ウェブログ（weblog)」の略。」（三省堂編修所編　2021）とされている。日本国内でのブログ登録者数は，2009 年 1 月末で約 2,695 万人（総務省情報通信政策研究所 2009）であった。また，2010 年のソーシャルメディアの利用率（全世代における「これまでに利用したことがあるソーシャルメディア」）で「ブログの利用率」は，77.3%であった。これは「動画共有サイトの利用率」62.8%，「SNS 利用率」53.6%より多かった（総務省 2010）。それから 10 年経った 2020 年の総務省による報告では，休日にインターネットを利用する人（全世代）の平均時間は「ブログやウェブサイトを見る・書く」27.9 分，「ソーシャルメディアを見る・書く」44.2 分，「動画投稿・共有サービスを見る」58.0 分（総務省情報通信政策研究所 2021）であった。このデータから近年，動画投稿・共有サービスやソーシャルメディアに比べブログやウェブサイトを利用する時間は短くなったが，インターネットの利用目的として定着していることがうかがえる。2008 年に「ブログ」という語が使用された件数は 187 件とこれまでの最高の値（表 1）で，これは 2010 年に「ブログの利用率が 77.3%」で他のソーシャルメディアより

利用率が高かったことを示す総務省（2010）の報告と関連性がうかがえる。そして，使用された件数が最も多かったのは 2008 年だが，その後も恒常的に使用されていることは，ブログがインターネットの利用目的として定着していることを示す報告（総務省情報通信政策研究所 2021）と関連しているといえるだろう。

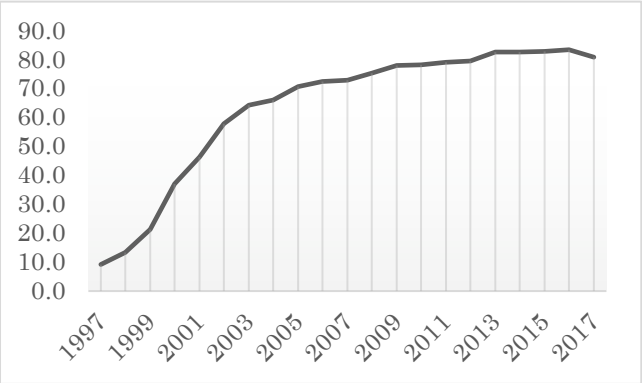
表 1 を見ると，2008 年の「ブログ」が使用された件数は 187 件で，2009 年は 82 件であった。一方，2008 年の「ウェブサイト」が使用された件数は 26 件で，2009 年は 198 件であった。2009 年になると「ウェブサイト」の件数が増え，「ブログ」の件数が減るという逆転現象のようなものが見られたが，本研究でその要因を特定することはできなかった。

6. 考察

野崎 100 語のうち，分類語彙表にも 5 本の先行研究で示されたリストにもなかった語は「レシピ」「スマホ」「ウェブサイト」「ブログ」の 4 語であった。分類語彙表（2004 年に発行）にこれらの 4 語が掲載されていなかったことから 2004 年以前にこれらの 4 語は一般的でなかったことがわかる。そして，2003 年以前に新聞（生活面）で多く使用された外来語のリストにも「レシピ」「スマホ」「ウェブサイト」「ブログ」の 4 語は含まれていなかった。このことから，これらの 4 語は「新聞（生活面）において 2004 年以降一般化した外来語」と考えることができるだろう。これら 4 つの語のうち 3 つの語「スマホ」「ウェブサイト」「ブログ」が ICT（情報通信技術）に関する語であった。表 3 は，日本国内のインターネット利用率の推移を表にしたものである（総務省 2019）。利用率は，1997 年から 2003 年まで急激に増加している。その後，増加は比較的緩やかになり 80%前後に落ち着いている。これは，インターネットが普及したと言い換えることができるだろう。ICT に関する 3 つの語が一般化した背景にインターネットの普及があったと推測できる。

研究の背景で述べたように筆者は，コロナウイルスに関連する語は新聞でも多用されている印象であったが，野崎 100 語に「コロナ」「コロナウイルス」は含まれていなかった。追加調査をしたところ，

表 3　インターネット利用率の推移



（出典『令和元年版情報通信白書』総務省 2019）

2004 年から 2021 年に発行された朝日新聞（生活面）で「コロナ」（太陽大気の最外層の意味での使用も含む）という語が使用された記事の件数は 328 件，「コロナウイルス」という語が使用された記事の件数は 443 件であった。「コロナ」が太陽大気の最外層の意味で使用されていたのは，期間中 1 件であった。つまり，「コロナ」が「コロナウイルス」の略語として使用されたのは期間中 327 件であった。コロナ禍を 2020 年以降とすれば 2020 年以降一般化した外来語といえそうである。

「コロナウイルス」とその略語である「コロナ」がそれぞれ多く使用されていたことは，「スマートフォン」とその略語である「スマホ」がそれぞれ多く使用されていた様子に似ている。クドヤーロワ（2015）は，1984 年から 2006 年に発行された「朝日新聞」を調査し，略語「コンビニ」は，会話的表現から使われ始め，やや口語的である紙面でさかんに使われるようになったことを示した。また，どの紙面でも略語「コンビニ」の使用が増加していたが，社会面では原語を上回ることがなかったことから，事件などの現場として報じられる際，略語ではなく原語が使われることが非常に多いことを明らかにしている。本研究は，新聞の生活面に限定したものであったが「コロナ」と「コロナウイルス」，「スマホ」と「スマートフォン」の使い分けについては，それぞれが使用された記事の内容を分析していく必要があるだろう。

7. まとめ

7.1　本研究で明らかになったこと

本研究では，新聞（生活面）において 2004 年以降一般化した外来語に「レシピ」「スマホ」「ウェブサイト」「ブログ」の 4 語があることが明らかになった。これらの 4 語は，先行研究で示された日本語学習者にとって必要性が高いと思われる外来語のリストに含まれていなかった。先行研究で，「（基本語彙などは）更新が必要である」（井上 2004，平田・山下 2020）と述べられているように，今後，外来語基本語彙を更新することがあれば「レシピ」「スマホ」「ウェブサイト」「ブログ」の追加検討を提案したい。

これらの語を分析していく過程で「レシピ」という語は本来の意味と異なる使用例があり，意味の拡大が見られた。また，「スマホ」という語は，「料理メモ」で使用された件数を除いた場合，「スマートフォン」という語と使用頻度が大きく違わないということがわかった。他にも，「ブログ」という語が使用された頻度と総務省情報通信政策研究所（2021）が示したインターネットの利用目的のうちブログが占める割合と関連性がうかがえた。

7.2　調査の意義

研究の背景で述べたように，近年一般化された外来語が，日本語学習者用教科書や単語帳に掲載されるのには時間がかかる。同様に，日本語学習者用の辞書もそうであったが，インターネット上の辞書は，紙媒体の辞書に比べて近年一般化された語も反映され易く，無料で使用できるものも多い。現在，日本語学習者の多くが辞書アプリやインターネット上の辞書を利用している（石黒・佐野・吉 2023）。日本語学習者にとって近年一般化した語を検索することは容易になったといえる。しかし，日本語学習者がどんな語を学んだらよいかという点については，日本語教科書や単語帳が未だ有効と思われる。日本語教科書や単語帳に掲載する語の更新のためにも，一般的に使用される語の調査は，外来語を問わず今後も必要であろう。

7.3　本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は，5.2 で述べたように「レシピ」，「スマホ」という語が多く使用されている理由が連載記事に関連した語で，朝日新聞という媒体に依存している場合も考えられるため，語としての重要度を限定できないことである。また「コロナ」，「コロナウイルス」の例の通り，調査期間中後半に多く使用された語の重要度を示すことができないことである。今後の課題として，別の媒体（例：他の新聞のデータベース，自治体からのお知らせ，商品パッケージなど）を用いて日常生活で目にする外来語について追加の調査や調査資料の発行年別の調査が必要である。そうすれば，日本語学習者用の基本外来語リストや外来語辞典の更新に有用かどうか判断できるのではないだろうか。

注

1. 外来語の定義は「漢語を除く，外国の言葉が日本に入り込み定着したもの」（国立国語研究所 2000）とする。先行研究でカタカナ語とされているものは，カタカナ語とする。
2. 河野太郎防衛相が 2020 年 3 月 24 日の記者会見で「日本語で言えることをわざわざカタカナで言う必要があるのか」と持論を展開した。「分かりやすく説明するのが大事だ」と，防衛省から厚生労働省に言い換えを求める意向を示した。（朝日新聞デジタル 2020 年 3 月 25 日）
3. 金（2011）は，外来語が日本語語彙の周辺にある非基本語から基本語の中に移行することを「基本語化」と表し，塩田（2022）は，外来語が「在来語化」していると表した。本研究では，それまで馴染みのなかった外来語の使用頻度が上がることを「一般化」とする。
4. 「基幹語彙」とは「ある語集団の基幹部として存在する語彙」（林 1971）のことである。
5. 日本語教育分野において基本語彙とは「ある目的のために頻度や重要性を考慮して選定されたもの」，「それぞれの分野で調査した言語資料を基に，頻度が高くて使用範囲が広く，当該分野で重要な語を客観的に選定」したもの（近藤・小森 2012）を指す。また，「基礎語彙」とは「意味の論理分析によって求められた半人工的な語彙」（林 1971），「日常の言語生活に必要な最小限の語を心理学的な見地から選定した」もの（本田 2016）

を指す。つまり，基本語彙は使用頻度などから客観的な判断で選ばれた語彙で，基礎語彙は選者の主観で選ばれた語といえるだろう。しかし，日本語教育分野において，「基本語彙」と「基礎語彙」の区別は明確になっておらず（近藤・小森 2012），選者の主観で選ばれた語を含む語彙を「○○基本語彙」としている先行研究がある。本研究では，選者の主観で選ばれた語を含む語彙が先行研究において「○○基本語彙」とされている場合は「基本語彙」として取り扱う。

6. 『分類語彙表 増補改訂版』（国立国語研究所 2004）p.3
7. 記事 1 件の中に同じ外来語が何度使用されても使用件数は「1」とする。コーパスを用いた調査では延べ語数，異なり語数を求めることができるが，本研究で使用した『朝日新聞クロスサーチ』では，それらを求めることはできないため，本研究では延べ語数については考慮しない。
8. 『朝日新聞クロスサーチ』上の検索条件は，次の通り。詳細検索，朝日新聞のみ，異字体を含めず検索，同義語を含めず検索，発行日　2004 年 1 月 1 日から 2021 年 12 月 31 日，検索対象　本文のみ，朝刊と夕刊，生活面（生活＋くらし），本紙のみ，発行社　東京

引用文献

朝日新聞社『朝日新聞クロスサーチ』https://xsearch.asahi.com（2022 年 12 月 22 日閲覧）

朝日新聞（2020）「河野氏「なんでカタカナ？」「クラスター」連発に苦言」朝日新聞デジタル https://www.asahi.com/articles/ASN3T660VN3TUTFK00N.html（2024 年 7 月 6 日閲覧）

石黒圭・佐野彩子・吉甜（2023）「世界の日本語学習者の辞書ツール使用事情」『社会言語科学』第 26 巻，第 1 号，5−20

井上道雄（2004）「カタカナ語（外来語）基本語彙 550 語－その語彙特性と選定基準」『神戸山手大学紀要』第 6 号，65-79

金愛蘭（2011）「20 世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究』別冊 3 号，大阪大学

クドヤーロワ・タチアーナ「現代新聞における略語の使用と定着」『日本語学』第 34 巻，第 2 号，18-28，明治書院

講談社編（2000）『最新カタカナ語辞典第 2 版』講談社

国際交流基金（2002）『日本語能力試験出題基準【改訂版】』日本国際教育支援協会

国立国語研究所（2000）『白書，広報誌における外来語の実態（本編）』国立国語研究所

国立国語研究所（2004）『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書

国立国語研究所「外来語」委員会（2007）『国立国語研究所報告 126 公共媒体の外来語』https://www2.ninjal.ac.jp/gairaigo/Report126/report126.html（2022 年 2 月 28 日閲覧）

近藤安月子・小森和子（2012）『研究社日本語教育事典』研究社

佐竹秀雄（2002）「新聞の生活家庭面における外来語」，玉村文郎編『日本語学と言語学』明治書院，198-207

三省堂編修所編（2021）『見やすいカタカナ新語辞典第 4 版』

塩田雄大（2022）「外来語は在来語化する」『日本語学』第 41 巻，第 2 号，116-127，明治書院

陣内正敬（2008）「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』1147-60，関西学院大学

総務省（2010）「ソーシャルメディアごとの利用実態」『平成 22 年版情報通信白書』www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h22/html/md122100.html（2022 年 11 月 21 日閲覧）

総務省（2017）「スマートフォンの普及」『平成 29 年版情報通信白書』https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc151220.html（2022 年 11 月 21 日閲覧）

総務省（2019）「インターネットの登場・普及とコミュニケーションの変化」『令和元年版情報通信白書』https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/html/nd111120.html（2024 年 7 月 29 日閲

覧）
総務省情報通信政策研究所（2009）「ブログ・SNS の経済効果に関する調査研究《報告書》」https://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2009/2009-I-13.pdf（2022 年 11 月 21 日閲覧）
総務省情報通信政策研究所（2021）『令和２年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書＜概要＞』https://www.soumu.go.jp/main_content/000765135.pdf（2022 年 11 月 21 日閲覧）
中山恵利子・桐生りか・山口昌也（2007）「新聞に見る基幹外来語」国立国語研究所「外来語」委員会『国立国語研究所報告 126 公共媒体の外来語』https://www2.ninjal.ac.jp/gairaigo/Report126/houkoku3-3.pdf（2022 年 2 月 28 日閲覧）
日本語学習辞書支援グループ（2015）「日本語教育語彙表 Ver2.8.3」https://jreadability.net/jev/（2022 年 11 月 21 日閲覧）
野崎登司枝（2024）「新聞（生活面）における外来語の使用実態調査」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』第 24 巻，第 2 号，145-156
林四郎（1971）「語彙調査と基本語彙」『電子計算機による国語研究』3 巻，39，1-35，国立国語研究所
平田史織・山下直子（2020）「外国人生活者のための基本カタカナ語彙について」『香川大学教育学部研究報告』2 巻，83-92
本田ゆかり（2016）「大規模コーパスに基づく日本語教育語彙表の作成」東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士（学術）論文
彭飛（2003）『日本語の特徴外国人を悩ませる日本語から見た漢字と外来語編』凡人社
望月通子（2012）「基本語化を考慮したカタカナ外来語の学習と教材開発－その振り返りと新たな開発に向けて－」『関西大学外国語学部紀要』第 6 号，1-16
NHK 放送文化研究所（2021）「ことばの研究」https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/20210301_4.html（2022 年 11 月 21 日閲覧）

(Received:August 20, 2024)
(Issued in internet Edition:September 2, 2024)